

動書庫のまわりは空気層が囲んでいますが、地下にもピットという空間を設けています。地面の下というのは、年間を通して温度がほぼ一定なんです。外気に比べて夏は涼しく、冬は暖かく感じられるわけです。ですから、外気はいったん地下ピットを通してから空調機に流し込むつくりになっています。空調負荷が低減され、省エネルギーにつながります。

照明はLEDを多用するとともに、人感センサーや照度センサーで調整しています。LEDは光源が小さくてちかちかするので読書には適さないといわれますが、閲覧机で採用しているものはアクリル板をかぶせて、集光とグレア対策を講じています。



©EIJY YONEKURA  
中央の吹き抜けと階段

**石川** バリアフリーの面ではどのように取り組みがなされていますか。

**原田** もともと立教大学はキャンパス全体でかなり手厚く配慮されていて、どこの建物も、車いす等で問題なく利用できるようなつくりになっています。図書館も同様です。段差のないつくりにし、各フロアはエレベーターでアクセスでき、自動扉付きの多目的トイレを各階に設置しています。

**石川** 今後、50年以上にわたって利用し続けるなかで、図書館に求められる機能も変わっていくと思います。改修やゾーニングの変更についてはどんな対応が可能ですか。

**原田** 配管など各種整備関係は建物の四隅のコア内に集約されていますので、更新や改修のしやすい建物になっています。

ゾーニングの変更につきましても、コア以外の壁は構造

壁ではありませんので、将来的にグループ学習室をやめてオープンなスペースを増やしたり、書架をすべて取り払ってアクティブに勉強する空間にしたり、かなりフレキシブルにアレンジしていただける構造です。

## ■内と外の「間」<sup>あわい</sup>

**吉岡** 外観と内観がレンガで連続する構造を見たときに、内と外の「間」という言葉が合うと思いました。外が見えるガラス張りのところも内と外の間の空間になっていて、その日その日の気候や外環境の変化を感じることができます。

図書館の使い方も、館内で本を借りたりして用事が済んだら終わりというのではなくて、図書館そのものが勉強する空間でもあり少しリラックスできる空間でもあるというのがいいですね。そういった内と外の「間」の空間というのがキャンパスの中にあることで、大学全体がとてもよい雰囲気になっていると思います。

**石川** 吉岡総長のおっしゃる通り、この建物には「間」という表現がピッタリだと思います。今回、長時間滞在というコンセプトを図書館は提案しましたが、一方で長い時間リラックスしてあの空間の中にいられる快適性が追求され、もう一方では、知性と向き合うときの緊張感のようなものが維持されているという感じがしました。それぞれが非常にうまく溶け合っているという印象があります。

**吉岡** そこからもう一步踏み込むと、本を読むのもそういう体験だと思います。つまり、本を読んでいる自分と読まれている本との間というのは、現実と本の世界を行ったり来たりしている非常に微妙な空間だと思うんです。そもそも外の知識と自分の知識、どこまで自分が知っていることでどこからが新しい知識か、本当はわからないわけですよね。そのつながっている微妙なところをつくりだすのが知性だと考えると、新しい図書館は非常にシンボリックな意味を持っていると思います。

**石川** 新しい図書館が多くの利用者に愛されるとともに、キャンパス全体に学びの気風が満ちあふれていくことを期待して座談会を終了したいと思います。本日はありがとうございました。

(2013年2月6日 太刀川記念館にて)

## 池袋図書館の設計を語る

2012年11月7日にオープンした池袋図書館は、延床面積約19,000平方メートル、所蔵可能冊数約200万冊、閲覧席数1,520席を有する国内最大級の大学図書館です。

建物の設計上の特徴や大学の中での図書館の位置づけなどについて、設計を担当された株式会社日建設計の原田氏と吉岡総長による会談が行われ、進行を石川図書館長が務めました。



### ■池袋図書館の設計コンセプト

**石川** 池袋図書館はどのようなプロセスで設計されたのでしょうか。

**原田** まず、設計と構造と意匠の担当者を選任するところからスタートしました。意匠設計者である私一人が、こんなデザインにしたいと勝手に絵を描いただけでは良い建築物は出来上がらないのです。設計と構造と意匠の担当者同士がラフスケッチの時点でアイデアを出し合って図面を描き、それを実現するための道筋を立てていきました。最初に意匠ありきで、構造や設備は後からついてくるものだと考えられがちですが、それでは、ただ壁と柱があって、エアコンや照明がぶら下がっているだけの一体感のない建物になってしまいます。長い間、快適に使っていただく施設をつくる際には、設計初期の段階から、構造、設備を意匠に組み込んで展開することが非常に大事です。



石川図書館長

それから、立教の池袋キャンパスといえば、誰もが赤レンガと瓦屋根の学舎を連想します。このシンボルゾーンが織りなす景観は、いわば立教さんのアイデンティティともいえるものです。図書館の設計の際にはそれを損なわずにいかにか継承していくかを最も重視しました。

池袋キャンパスを見てまず感じるの、建物をとても大切にされているということです。単に歴史や伝統として保存し守るだけではなくて、積極的に手を入れて設備更新や構造補強を行い、常に学生さんが快適に使えるようにされてきた。その姿勢がキャンパスに活気を呼んでいるように思いました。

池袋キャンパスには、シンボルゾーンの学舎から自然に形成されているキャンパスの「デザインコード」があります。新しい図書館はそのコードに沿うものでなければならぬと考えました。そこで、赤レンガを継承するとともに躯体の表現としてコンクリートを前面に出し、建物の中の人の動きや活動が見えるよう、外装にはガラスを多用してシンプルかつストイックさが感じられる設計にしました。

最初にロイドホールを訪れたとき、新しい建物に見えないというか、前からそこにあつたかのような印象を受けるかもしれませんが、これは「デザインコード」を守りながらつくっていった結果です。

**吉岡** 池袋キャンパスの構造は、正門を入れて右側にチャペルがあり、旧図書館は左側にありました。正面に本館が立ち、その先の2号館、3号館はもともと寄宿舎だったんですね。そして一番奥に食堂があるという形になっています。正門から本館までが「信仰と理性」という精神生活をつかさどっている。その先は寝て起きて暮らしていく場で、昔は体育館もありましたが、それらの建物は身体性を表しており、学舎はちょうどその真ん中に位置しているんです。これはイギリスの大学のカレッジ形式の基本だそうですが、大きな言い方をすれば、コスモロジーというか、宇宙観というコンセプトに基づいて形成されているのです。

Your Library 第23号(通号82) 発行日 2013年3月8日

編集 井川 充雄(図書館副館長) <http://www.rikkyo.ac.jp/research/library/>  
 発行人 石川 巧(図書館長) 連絡先 TEL 03-3985-2630  
 発行 立教大学図書館

立教大学図書館モバイルメニュー

1 蔵書検索  
 2 開館スケジュール  
 3 図書館設置PC利用状況の確認  
 携帯電話から  
 ことができます。





吉岡総長

これまでの改修には、いろいろな設計会社の方が携わっていただきました。業者さんが違ってキャンパスの統一感が失われないのは、皆さん苦勞されながら、原田さんのおっしゃった立教の「デザインコード」を活かして下さっていたからだと感じています。

**石川** ストイックという表現はとてもいい響きですね。最近の傾向として、人目を引く斬新なデザインの図書館を目にすることが多いのですが、池袋図書館はオーソドックスで、直線的な美しさがあります。利用している学生からは「とにかく勉強したくなる空間だ」という声をよく聞きます。

**原田** 未来へつなぐということを考えると、我々の誰もがいなくなった100年後の世代も使ってくれる建物でなければなりません。そのためには普遍的な建築にする必要があると考えました。できた時は独創的でも、何年かすると前時代的なものになってしまうようなデザインはそぐわないのです。

池袋図書館は構造的にも設備的にも研ぎ澄まされていて、無駄がないんですね。建物は「大スパン構造」といって、柱など支点の間隔を大きくとった建築計画となっています。死角を生む柱を極限まで減らして限られた空間を有効に使えるというメリットがあります。この大スパン構造を可能にしたのが、PC（プレキャストコンクリート）板を用いた方式で、橋梁や道路にも使われており、厚さの割に強度は抜群です。施工会社の清水建設さんからも「減らせるぜい肉がない、非常に筋肉質な建物だ」というコメントをいただきました。

**吉岡** 外側が直線的で無駄のない作りである一方で、内部の空間のとり方は非常にぜいたくなんです。ストイックであることと、余裕があつて豊かであることは矛盾することなんですけど、そこがうまく共存して魅力を生んでいますね。

## ■豊かな空間を支える堅牢な構造

**石川** 耐震性の点はいかがでしょう。

**原田** 非常に堅牢にできています。地震に対する耐久性は建築基準法が定めるところの1.25倍ですので、安全な建物だと思っていただいて大丈夫です。特に3・11の震災では、設備機器がはずれたり、天井仕上げが落ちてきてしまったという事例もありました。その部分でも安全基準を高くしていますので、ご安心ください。

**石川** その他、外観や構造の特徴や魅力をご紹介いただけますか。

**原田** 図書館は開放感を持たせるためにも、天井は少し高めにするのが理想的です。最低でもフロア高4.5mは欲しいところですが、今回は日影規制の関係で、2階で4.05m、3階に至っては4mを切っています。それでもあれだけの広々とした空間をつくり出したのは、PC板の使用のほか、書架に秘密があるんです。通常、図書館の書架は転倒防止のため、「頭つなぎ」といって上部に鋼材を渡して連結する補強法を施しています。そうすると、頭上の圧迫感が確実に増してしまうんですね。池袋図書館では柱を床から持ち出して倒れない書架をつくりました。既製品の書架と違い、柱が大変太くなっています。

PC板についてももう少しご説明させていただきますと、フロアから天井を見上げると船底のように見えるかもしれません。あばら骨のような細い梁はリブといって、強度を補強するものです。通常はリブの上辺を広げて端の部分を広くして接合しますが、今回は、そのリブをひっくり返したんです。そうすると、リブは真ん中でたわまず、まっすぐ通っているように見えます。柱際のところには谷ができますので、そこに床吹き空調のメインダクトを通しました。意匠と構造と設備が三位一体となった結果、空間を豊かに使った建築が可能となりました。

## ■心配りされた内部デザイン

**石川** 内部の空間デザインにはどんな特徴がありますか。

**原田** 外装のレンガが外から内部に入り込む構造にして、内と外の連続性を持たせました。また、閲覧席は地下1階から地上3階までの4層にわたっていますので、図書館空間全体を見渡せるものが必要だと考えて設置したのが中央階段です。学生さんは階段を上り下りしながら、さまざまな学習スタイルで頑張っている仲間の姿を見ることができます。グループ学習室や講習会室の間仕切りをガラスにしたのも、

音はしっかり遮断しつつ、学びの雰囲気を与える効果を狙ったことです。

**石川** あの中央階段は非常に象徴的ですね。

**吉岡** 図書館というのは非常に静かな空間ですけども、中央部の階段によって運動が入り込み、視界が移るというダイナミズムが生まれます。今の学生はエレベーターを使うことが多いのに、階段を利用する学生が多いというのは、やはりあそこは歩いていて気持ちがいいということですね。

**石川** 家具や内装についても、ぜひ特徴を教えてください。

**原田** 図書館さんからご提示のあった「滞在できる図書館」というコンセプトに基づき、シンプルながら居心地のよい空間を目指しました。家具の色調は重くなりすぎず、落ち着きを得られるような、やや暗めの茶色で統一しています。コーナーごとにデザインの違う椅子を数種類用意していますので、自分のお気に入りが見つかるのではないのでしょうか。フロアカーペットは、家庭的といいますか、温かみのある色を使った、少し派手な柄のものを採用しています。地味すぎると冷たい感じも受けやすく、飽きてしまうんですね。

特に配慮したのは閲覧席です。通常の寸法よりも幅が広く、奥行きも深いテーブルになっています。学生さんがパソコンを使いつつ、資料も広げて勉強ができるようにという図書館さんの配慮なのですが、あれは非常に良かったと思います。閲覧席の座面もしっかりしたもので、ゆったりと、長時間座っていても疲れなくなっています。

**吉岡** 図書館というのは基本的には本を集める場所、本が主人公ではあるんだけど、今回新しく作った図書館は利用者のこともすごく考えていて、それもやはり特徴ですよな。

**石川** 内部のことでは何か特徴的なことがありますか。

**原田** もう一つ注目いただきたいのは、いろいろなものが



原田 由紀氏

日建設計 設計部  
設計主管

1996年東京理科大学工学部建築学科卒業。同年日建設計入社。  
立教では11、12、14号館、7号館B棟、マキムホール、太刀川記念交流会館などを設計。  
ロイドホール建設においては設計チームのリーダーを務める。

1.65mユニットで構成されている点です。書架もPC板も吊り照明も1.65m間隔で並んでいるんですね。また、スピーカーやスプリンクラーを天井にじかづけできませんので、吊り照明のパネル部分に設置しています。さまざまな設備具が規則性をもってちりばめられているので学生のみなさんには、ぜひ上にも目を向けてほしいですね。

**石川** ラーニング・スクウェアの自動ドアの上部にアートを掲げるのが相応しいという計画になり、総長と図書館で言葉を選びました。敢えて目立たないようにしていますが、ギリシャ語で「汝 自身を知れ」と刻んでいます。



レリーフ

**原田** あれは陶器で、やきものの意匠を専門に手がける会社さんと私どもと一緒に作ったものです。陶板メーカーの方の、「『知の集積』である図書館には、古いものの上に新しいものが重なる地層のようなイメージがある」という言葉からデザインを膨らませました。よく見ていただきますと、板の下のほうは少しごつごつした石や岩を連想させるような仕上げになっており、上にいくほどきれいに、つるりとした表面になっています。縦方向に走るラインは、本の背表紙をイメージしてくり抜いた型でつくりました。学生のみなさんにもぜひお確かめいただければと思います。

## ■環境負荷とバリアフリー

**石川** 環境面ではどのような配慮がなされていますか。

**原田** エントランスホールには、北側の天空光を反射させて採り入れています。昼間は照明がなくても、かなり明るいのではないでしょうか。南側は太陽熱の集熱ダクトになっています。冬季は太陽熱で温められた空気をダクトからエントランス部分の空調機に送って暖房効率を上げています。

地下2階の自動書庫は湿気や温度の変化を嫌いますので、外部の環境から完全に切り離す必要がありました。自